小学校　社会科学習指導案

尾道市立久保小学校　金野　誠志

１．対象学年　第６学年

２．単元名　　開国と幕府政治の終わり

３．単元設定の理由

公民的資質の基礎を養うことが，社会科の究極的なねらいである。この公民的資質を培うためには，授業を通して，どのような行動が社会的に考えてより妥当であるかを決定する「合理的意思決定能力」を育成する必要があろう。そのために本単元では，以下のＡ～Ｅに示した幕末期の尾道（児童の所属する地域）を舞台にしたエピソードを追体験し，当時の尾道の町年寄になりきって意思決定をおこなう。これらの活動を通じて，課題の解決や願いの実現に向けて努力した先人の働きについての理解を深めることも可能となろう。

Ａ．幕府が攘夷を朝廷に上奏したので，尾道周辺にも砲台を建設した件。
Ｂ．第一次長州征討で広島が本営となっていた1864年７月，薬師堂に攘夷派の貼り紙（外国との交易に手を貸す商人は天誅する）がされた件。
Ｃ．第二次長州征討で広島が本営となり，戦闘前の1866年３月，長州藩奇兵隊の激徒約500人が尾道（幕府の役人が慈観寺に常駐していた）を焼き討ちする計画を立て，おしかけて来た件。
Ｄ．1867年９月の薩長芸３藩出兵同盟前から，御手洗・尾道で薩摩・長州・芸州各藩との密貿易が行われ，その後，出兵同盟に芸州藩が加わった件。
Ｅ．大政奉還後，1867年12月，約1300人の長州藩の兵が，福山藩等を監視しつつ武力討幕に備えて尾道に駐屯した件。

これらのＡ～Ｅは，尾道を舞台にしたエピソードであると同時に，全国的な歴史の動きに深く影響を与えたものでもある。児童にとって身近な地域の歴史を題材にすることは，当時の人々の抱えた諸問題を身近に感じさせ，問題の解決について積極的に考えさせるのに有効だからである。このような学習は，我が国の歴史や伝統を大切にし，郷土や国を愛する心情にもつながる。この単元を通じて，「合理的意思決定能力」が育成できると同時に，「歴史を学ぶ意味を考える」ことや「自分達の生活の歴史的背景や我が国の歴史の先人の働きについて理解と関心を深める」こともめざすことができる。

４．単元の目標

【社会的事象への関心・態度・意欲】

◎　黒船来航の背景や幕府の対応・強大な権力を持った幕府がなぜ倒れたかについて関心を持ち，その経緯を進んで調べ，当時生きていた人々の願いや考え方に迫ろうとすることができる。

【社会的な思考・判断】

◎　激動の社会の様子をふまえながら，新しい世の中を創ろうと活動した先人の生き方にふれ，歴史の見方や考え方を自分なりに捉え，その人物に対する思いや考えを持つことができる。

【観察・資料活用の技能・表現】

◎　新しい世の中を創ろうとして活動した先人の見方や考え方を，資料を活用して自分なりにとらえることができる。また，その人物に対する思いや考えについて，資料を活用して発表したり文章にまとめたりすることができる。

【社会的事象についての知識・理解】

◎　明治新政府が成立するまでの過程で，新しい世の中を創ろうとした先人の活動について，客観的事実を知り，それに基づいて理解することができる。

５．指導計画(６時間)

1169年，高野山領太田荘の倉敷地となった尾道は，中世初頭から益々賑わいを見せ始め，以後，江戸末期まで上方－下関間第一の津と呼ばれていた。司馬江漢も尾道について「ここは良き処にて，富商多し，西の小江戸と云とぞ」と記している。江戸時代，位置的には芸州藩内東端で，幕府が西国の鎮衛として派遣した福山藩と境を接していた。一方，芸州藩の西の隣藩は長州藩であった。これらの地理的関係は，公武合体・尊皇攘夷・二度の長州征討・大政奉還・武力討幕へと続く幕末の歴史的事象の渦中で，それまで中央の政治社会に関わらずひたすら保身をはかっていると評されていた芸州藩を雄藩へと押し上げ，尾道を激動の渦に巻き込んでいく。

単元を通して，尾道が次々と抱える歴史上の課題に対して，児童に連続・発展的に意思決定をさせるため，下記のような指導を計画した。

時	主　な　問　い	主　な　目　標
1	○　1863年４月，幕府が攘夷を朝廷に上奏したので，尾道周辺に砲台をつくったが，攘夷は実行すべきか，町奉行へ意見を出そう。	○　各種資料を参考にしたり意見交換しながら，尾道近辺でも攘夷を実行すべきかどうか，個々の考えを相互に検討し合い意思決定するとともに，その過程で必要な開国・攘夷運動等と尾道・全国の状況について情報習得できる。
2	○　第１次長州征討で広島が本営になっていた1864年７月，薬師堂に攘夷派が貼り紙（外国との交易に手を貸す商人は天誅する）をしたが，この人達にどんな返事をすべきか，相談しよう。	○　各種資料を参考にしたり意見交換し，攘夷派にどんな返事をすべきか，個々の考えを相互に検討し合い意思決定するとともに，その過程で必要な尊皇攘夷運動・公武合体政策等と尾道・全国の状況の情報習得ができる。
3	○　第２次長州征討の戦闘を前にした1866年３月，長州藩奇兵隊の激徒500人が尾道焼き討ち計画を立ててやってきたが，この激徒たちにどんな話をすべきか相談しよう。	○　各種資料を参考にしたり意見交換しながら，激徒にどんな話をすべきか，個々の考えを相互に検討し合い意思決定するとともに，その過程で必要な尊皇攘夷運動・討幕運動等と尾道・全国の状況について情報習得できる。
4	○　1866年8月，第２次長州征討の終了後，芸州藩は薩長同盟に加わるかどうか悩んでしまったが，尾道としてはどうするのがよいか，町奉行に意見を出そう。	○　各種資料を参考にしたり意見交換しながら，尾道としては芸州藩が薩長同盟に加わるべきかどうか，個々の提案内容を相互に検討し合い意思決定するとともに，その過程で必要な討幕運動・佐幕運動等と尾道・全国の状況について情報習得できる。
5 6	○　1867年10月の大政奉還後，長州藩は，兵1300人を尾道に駐屯させたいと芸州藩に言ってきたが，どう返事をすればよいか，意見を出し合い寄合の結論を出そう。	○　今まで収得した情報をもとに意見交換しながら，尾道に長州藩の兵を駐屯させるべきか考え，武力討幕・大政奉還等と尾道・全国の状況について整理して，自分の最終的な意思決定を建白書にまとめることができる。

６．学習指導の展開

本時展開(５/６)　教師の働きかけ［◎主発問　○助発問　☆指示・説明　◇資料提示　□支援］

教師の働きかけ	資　料	T-C活動	予想される子どもの反応・考えの変容		思考
◇資料を配布 ☆今までの学習を振り返ってみよう。 □今までの授業で取り上げた資料を常時活用できるよう，教師も子ども達も準備しておく。	藩境の道標 大政奉還後の政権構想図	T：資料提示説明 C：２つの考えを整理する	長州藩の考える武力討幕とは，徳川宗家の政治権力を武力に訴え根こそぎなくして，天皇をかつぎ出し，全く新しい政治体制を目指そうとするものだ。	徳川慶喜の考える大政奉還とは，形の上で朝廷に政治権力を返し，実際は，徳川宗家が政治権力の中心となり，諸藩との合議による政治体制を目指そうとするものだ。	事実判断
☆1867年10月の大政奉還後，長州藩が兵約1300人を尾道に駐屯させてほしいといってきました。			長州藩の兵を尾道に受け入れることは，武力討幕の考えに賛成することにつながる。	長州藩の兵を尾道に受け入れないことは，大政奉還の考えに賛成することにつながる。	推理
◎もし，あなたたちが尾道の町年寄だったら，町奉行にどんな意見を出しますか。寄合を開き，意見を出し合いましょう。		T：発問する C：答える	長州藩の兵を受け入れるべきだ。	長州藩の兵を受け入れるべきではない。	価値判断
□武力討幕・大政奉還の基本的考え方を子ども達の意見の中から引き出しながら，整理して板書する。 □武力討幕・大政奉還の主張そのものよりも，何を根拠にしているのかを把握し，その質を評価する。 □武力討幕・大政奉還それぞれが現実に進んだとして，尾道や全国に及ぼす影響を予測させ，話し合いを組織する。			○　徳川慶喜を政治の中心に残すと，幕府に都合の良い政治をして，日本全体のためにならない。 ○　身分制・鎖国－開国・大政奉還等，全て幕府を少しでも長続きさせようとするためだった。 ○　新しい時代を切り開いていくためには，徳川宗家の権力を残さないほうがいい。残すと，結局，江戸時代の続きみたいなもの。 ○　話し合いで，徳川慶喜が政治から手をひくはずがない。大政奉還後の態度でも明らかだ。 ○　幕府の支配がなくなる方が自由に商売ができ，尾道にとっても良い。 ○　福山藩に監視されたりする必要もなくなる。気にしなくていい。 ○　長州藩は，福山藩より強い。 ○　幕府と朝廷を切り離すためにも，幕府は早めにつぶしておくべき。 ○　第２次長州征討のとき，幕府方は負けたので戦えば勝てる。 ○　近代化した長州藩を敵にすべきではない。 ○　薩摩藩や長州藩と討幕の約束をしている。受け入れないと裏切ることになる。	○　西からは長州藩・東からは福山藩や幕府方に挟まれ，芸州藩は戦場になってしまう。 ○　物不足・物価高がもっとひどくなる。 ○　大政奉還したということで，今後の話し合いで徳川慶喜に政治から手を引かせていく方が良い。 ○　幕府の政治とは変わるのだから，少しずつでも変えて行ける。 ○　武力に頼らないほうが平和的でいい。 ○　戦いが始まりそうなところでは，商売はできない。船も来ない。 ○　幕府方は，関東以東にまだ大きな力を持っているのでまともにぶつかると負ける。 ○　フランスの力をかりて，前より幕府方も強力になっている。 ○　武力討幕を進めると，日本中が二つに別れて大戦争が始まる。 ○　武力討幕側はイギリスに，幕府側はフランスに力を借りているので，大戦争なり二つの国が加わると，外国に占領される。 ○　芸州藩は，一方で幕府に大政	

			○　焼き討ちの時とは，状況が違う。自分の街のことだけ考えていては，世の中は変わらない。 ○　天皇をいったん取り込んだ政治体制ができてしまうと，徳川慶喜の考えた体制を変えるのは難しい。 ○　開国して，ヨーロッパに学んでいるので，天皇中心と言っても今までとは違う。 ○　江戸時代の延長よりも，新しい世の中を創る方が大切。倒した後のことは，他の藩の人たちともじっくり相談して考える。	奉還を勧めているし，薩摩藩だって一時はしていた。 ○　尾道焼き討ち計画の時は，長州藩兵に他の場所へ行ってもらった。 ○　まず，話し合いで進め，どうしても徳川慶喜が政治の中心に居すわろうとしたら，そのとき考える。 ○　天皇中心の世の中ができると，奈良時代に逆戻りになる。 ○　幕府が倒れた後，必ずしも期待通りの世の中になっていくとは，限らない。	
☆それぞれの意見には，欠点や問題点があるようです。それを解決していく方法を考えた上で結論を出していきましょう。		T：指示する C：答える	長州藩の兵を受け入れ，武力討幕に協力しいく。	長州藩の申し入れは断り，話し合いで徳川慶喜に政治から手を引くようにしていく。	
○自分の考えを理解してもらい，相手に賛成してもらうためには，どんな対策が必要だろう。 □やたらに対立をあおるのではなく，武力討幕・大政奉還両派の共通の願いも併せて考えさせる。		T：発問する C：答える	○　福山藩には，徳川宗家中心の政治体制を終わらせる必要を話し仲間になってもらう。 ○　長州藩には，あらかじめ必要な物は自分で持ってきて，尾道の人の物不足・物価高がひどくならないように，協力してもらう。 ○　長州藩に協力するかわりに，尾道の町を荒らしたりしないようきまりを作ってもらう。	○　大政奉還を積極的に進めようとした諸藩と協力して，徳川宗家の政治権力を話し合いで，時間をかけても無くしていくよう，長州藩にも呼び掛ける。 ○　あくまで戦いは避ける。尾道を戦火に合わせたくない。 ○　武力は，最後の止む終えないときだけの手段。	
			徳川宗家を政治の権力の中心に残したくない。 外国の直接介入は避けたい。 尾道を戦火に合わせたくない。		
○寄合の結論を出しましょう。 □寄合の結論とは別に，建白書をしたため，個人の考えを表明する機会を保証する。		T：指示する C：この場は多数決をとる	次の時間に，個人個人の考えを建白書にして，町奉行へ出そう。 ○尾道だけの問題じゃない。 ○日本の将来がかかっている。 ○そう簡単に決めるわけにはいかない。 ○慎重な議論が必要だ。		

7．評価

☆　「1867年10月の大政奉還後，長州藩は，兵1300人を尾道に駐屯させたいと芸州藩に言ってきたが，どう返事をすればよいか，尾道の町年寄になったつもりで，町奉行へ意見書を書こう」という内容のプリテストを単元開始前に実施し，単元終了時に子ども達が書いた建白書と比較する。

☆　第１時・２時・３時・４時・５～６時のそれぞれの終末に，課題となっていることに対する自分の考えや解決方法を，尾道の町年寄として町奉行に書いて出す意見書・建白書として子ども達個々に作成させ，その記述を中心に授業中の活動の様子等を含め，変容をとらえる。

【社会的事象への関心・態度・意欲】
◎　子ども達が書いた意見書・建白書の内容等から，子ども達が尾道の町年寄という当時の人々のそれぞれの立場や考え方にどれだけ近づき，課題の解決に切実感を持って臨んでいるか把握する。

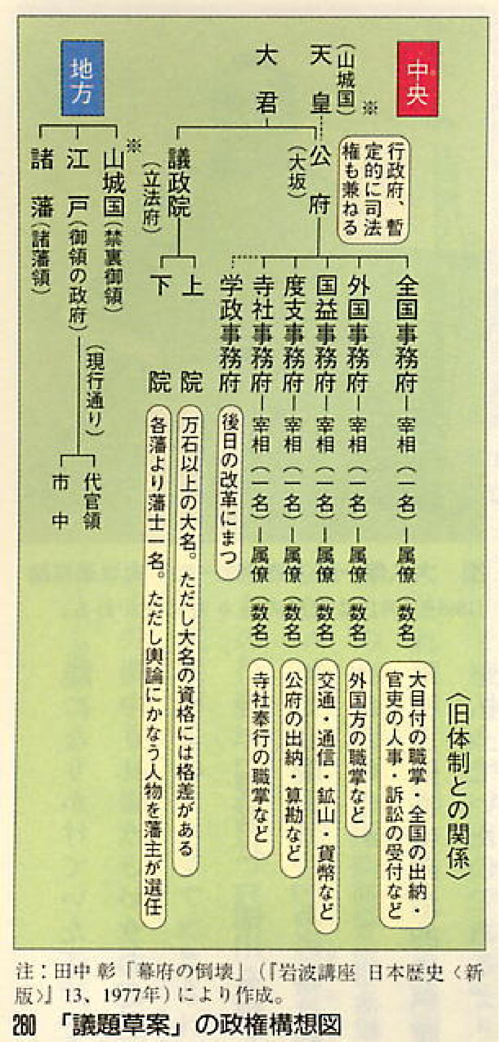
【社会的な思考・判断】
◎　子ども達が書いた意見書や建白書の内容を，トゥールミン図式に基づき分析し，導き出された結論を支える事実と理由付けの関係や，その量的・質的高まりを把握する。

【観察・資料活用の技能・表現】
◎　自分が書いた意見書や建白書の内容等に，自分とは異なる考えを持つ他者に対しての説得や共通点を探ろうとしたり，自説の問題点を補うために，適切な資料を用い表現したりしているか把握する。

【社会的事象についての知識・理解】
◎　子ども達が書いた意見書の内容から，第１時・２時・３時・４時のどの時間にどんな事実に関する知識を得ているか分析し，その内容が第５時～６時の建白書へ生かされているか把握する。

８．授業で使用した資料

旧山陽道の藩境にあたる，校区内の『番所』という地名の所に今も向き合って立っています。
（金野撮影）



（集英社　『日本の歴史⑮開国と倒幕』より）